

研究主題

「特別の教科 道徳」における評価の在り方
―指導方法の改善・充実に向けた取組を通して―

目 次

第 1	研究の概要	42
第 2	研究の背景とねらい	
1	研究の背景	43
2	研究のねらい	44
第 3	研究の方法	
1	研究の体制	44
2	研究の経過	45
第 4	研究の内容	
1	基礎研究	45
2	開発研究	50
3	検証授業	55
第 5	研究の成果と今後の取組	
1	研究の成果	64
2	今後の取組	64

< 研究の成果とその活用 >

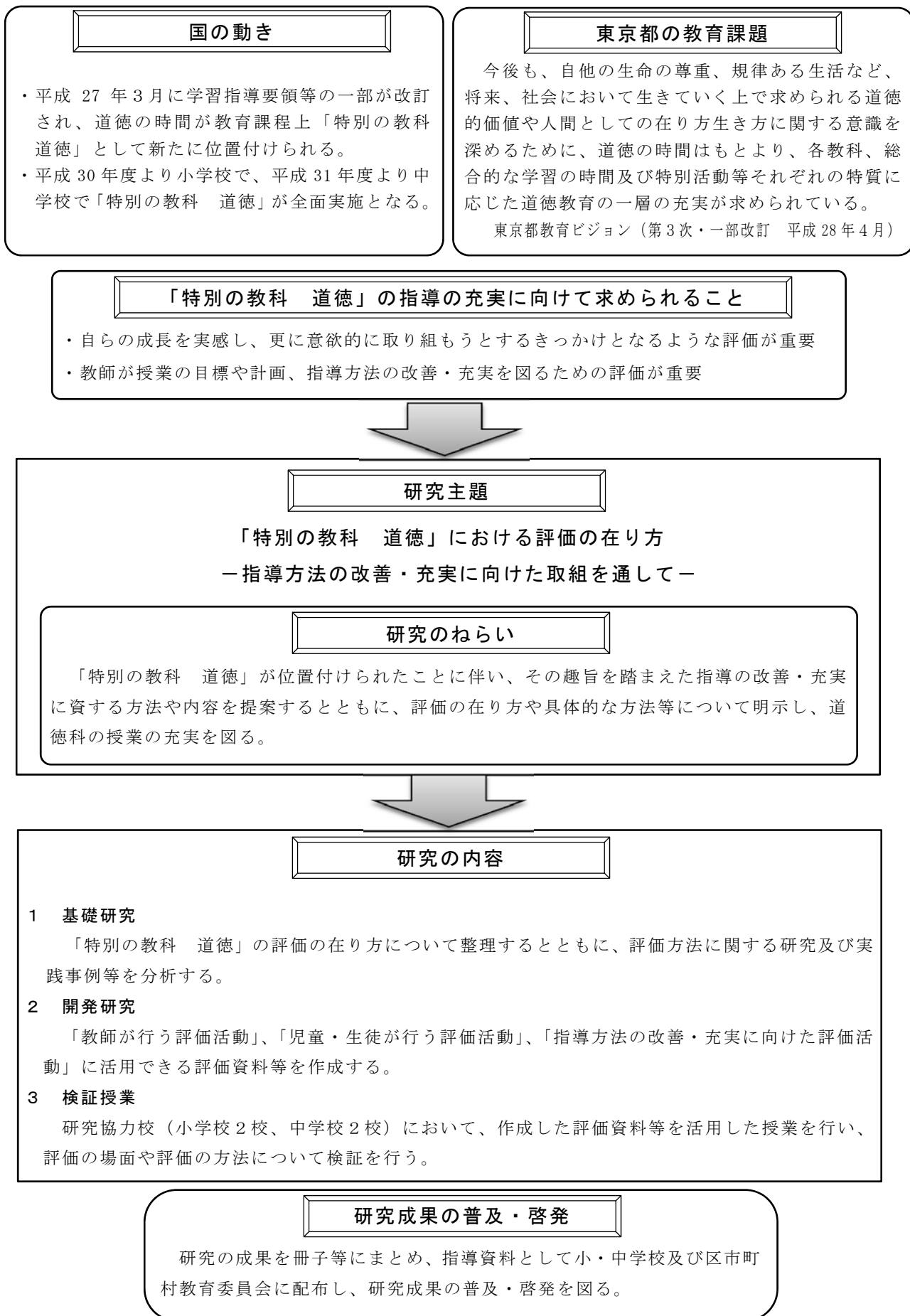
1 研究の成果

- (1) 「特別の教科 道徳」における評価の在り方や考え方についての整理・分析
- (2) 1 単位時間の授業における評価資料（ワークシート、座席表シート）の開発
- (3) 評価資料（ワークシート、座席表シート）を活用した評価モデルの提示

2 研究成果の活用

本研究の内容を基に作成した指導資料の活用による道徳科の指導と評価の充実

第1 研究の概要



第2 研究の背景とねらい

1 研究の背景

(1) 「特別の教科 道徳」創設の背景

道徳教育は児童・生徒の人格の基盤となる道徳性を養う重要な役割があり、我が国の学校教育において、道徳教育は道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行われてきた。

これまで、学校や児童・生徒の実態などにに基づき、道徳教育の重点目標を設定しながら充実した指導を重ね、確固たる成果を上げている学校がある一方で、例えば、歴史的経緯に影響され、いまだに道徳教育そのものを避けがちな風潮があることや他教科に比べて軽んじられる傾向があること等、多くの課題も指摘されている。そのため、児童・生徒の人格の基盤となる道徳性を養う重要な役割を担う道徳教育の更なる改善・充実に取り組んでいくことが求められている。中央教育審議会答申「道徳に係る教育課程の改善等について」（平成26年10月）においても、「特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にあるものと言わなければならない」、「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質である」と、道徳教育の本来の使命が示されている。

また、同答申では、

- ・道徳の時間を「特別の教科 道徳」として位置付けること
- ・目標を明確で理解しやすいものに改善すること
- ・道徳教育の目標と「特別の教科 道徳」の目標の関係を明確にすること
- ・道徳の内容をより発達の段階を踏まえた体系的なものに改善すること
- ・多様で効果的な道徳教育の指導方法へと改善すること
- ・「特別の教科 道徳」に検定教科書を導入すること
- ・一人一人のよさを伸ばし、成長を促すための評価を充実すること

などを基本的な考え方として、学習指導要領の改善の方向性が示された。

同答申を踏まえ、平成27年3月に学校教育法施行規則の一部が改正され、「道徳」が「特別の教科である道徳」となるとともに、平成27年7月の学習指導要領の一部改訂において、いじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものにする観点からの内容の改善、問題解決的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫を図ることなどが示された。また、発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童・生徒が自分自身の問題と捉えて向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」への質的転換が図られた。一人一人の児童・生徒が自分自身の問題として道徳上の問題を捉え、それと向き合う学習活動をとおして、道徳性を主体的に身に付けて行く指導へと転換することが、「特別の教科 道徳」の大きな目的となっている。そして「特別の教科 道徳」が平成30年度より小学校、平成31年度より中学校でそれぞれ全面実施となることを踏まえ、道徳科の指導と評価の更なる充実が求められている。

(2) 道徳教育の充実にに向けた東京都教育委員会の取組

東京都教育委員会では、平成 14 年 4 月より全小・中学校において「道徳授業地区公開講座」を実施し、家庭・地域と連携した道徳教育を推進するとともに、平成 24 年 7 月及び平成 25 年 4 月には、東京都教育委員会が独自に作成した「東京都道徳教育教材集」を全児童・生徒に配布するなどして、道徳教育の充実に努めてきた。また、東京都教職員研修センターにおいても、平成 27 年度に教育課題研究「『特別の教科 道徳』の趣旨を踏まえた指導と評価の在り方」に取り組み、「考える道徳」、「議論する道徳」の趣旨に迫る発問の在り方や、発問を重視した指導過程、指導事例等の開発を行った。

(3) 本研究の意義

平成 27 年度に取り組んだ教育課題研究「『特別の教科 道徳』の趣旨を踏まえた指導と評価の在り方」において、児童・生徒の成長の様子を把握する評価の在り方の整理を行い、その内容を「『特別の教科 道徳』指導読本」としてまとめ、全小・中学校に配布した。しかしながら、その後も学校の管理職や教員、教育委員会関係者等から「道徳の評価をどのようにすればよいのか分からない」、「道徳の評価の方法等について詳しく知りたい」との声が多数聞かれた。指導と評価は一体であり、道徳の授業において指導を充実させるための評価はこれまでも行われてきたところではあるが、「特別の教科 道徳」の全面実施に当たって、その趣旨を踏まえた指導と評価の在り方について明らかにし、更なる指導と評価の充実にに向けた基盤をつくる必要があると考えた。

2 研究のねらい

本研究では、「特別の教科 道徳」（以下「道徳科」という。）が位置付けられたことに伴い、その趣旨を踏まえた指導の改善・充実に資する方法や内容を提案するとともに、評価の在り方や具体的な方法等について明示し、道徳科の授業の充実に努めることを研究のねらいとしている。道徳科は、児童・生徒一人一人が、ねらいに含まれる道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己（人間として）の生き方についての考えを深め、学習を通して、内面的資質としての道徳性を主体的に養っていく時間である。そして、この道徳科の特質を全教師が共通に理解し、児童・生徒一人一人が見通しをもって主体的に考え、学ぶことができる学習を行っていく必要がある。道徳科の授業の充実に努めるためには評価の充実は必要不可欠であり、そのための方法等について検討することとした。

第3 研究の方法

本研究では、平成 27 年度の教育課題研究「『特別の教科 道徳』の趣旨を踏まえた指導と評価の在り方」で行った研究を踏まえ、特に評価の在り方についてその視点や場面、方法等について研究を行った。

1 研究の体制

研究を推進するにあたり、研究部会を組織し、東京都教職員研修センター所員 18 名（統括指導主事 3 名、指導主事 7 名の他、教員研究生 8 名）により研究をすすめた。

また、助言者として、永田 繁雄 東京学芸大学教授から研究の内容や方向性等について、2 回にわたって指導・助言いただいた。

2 研究の経過

研究の経過については、表 1 のとおりである。

表 1 研究経過

期間	内容
平成 29 年 2 月～平成 29 年 3 月	研究基本構想
平成 29 年 4 月～平成 29 年 5 月	基礎研究
平成 29 年 6 月～平成 29 年 8 月	開発研究（評価資料の作成）
平成 29 年 9 月～平成 29 年 11 月	研究協力校での検証授業の実施
平成 29 年 12 月～平成 30 年 1 月	検証授業の分析・考察、研究のまとめ
平成 30 年 2 月 20 日	教育課題研究発表会において、研究内容の発表

上記の他、研究部会を月に 2 回程度実施

また、小学校 2 校、中学校 2 校の計 4 校を研究協力校として指定し、計 12 回の検証授業を行った。研究協力校及び検証授業の実施については表 2 のとおりである。

表 2 検証授業

研究協力校	検証授業
渋谷区立神南小学校	通常の学級での検証授業（2 回）
町田市立小山ヶ丘小学校	通常の学級及び特別支援学級での検証授業（各 2 回ずつ計 4 回）
世田谷区立深沢中学校	通常の学級での検証授業（2 回）
豊島区立西池袋中学校	通常の学級及び特別支援学級での検証授業（各 2 回ずつ計 4 回）

第 4 研究の内容

1 基礎研究

(1) 評価の考え方や捉え方について

ア 道徳教育の評価に関する変遷

先行研究として、これまでの学習指導要領改訂における、道徳教育の評価の変遷について確認した（表 3）。昭和 33 年に道徳の時間が教育課程上に位置付けられ、学習指導要領の総則に「指導の成果を絶えず評価し、指導の改善に努めること」が示されるとともに、小学校学習指導要領解説 道徳編には、道徳の時間だけについての児童の態度や理解などを、教科における評定と同様に評定することは適当ではないことが明記された。平成 10 年の学習指導要領では、「道徳の時間に関して数値などによる評価は行わない」という文言が加わるとともに、「評定」という文言が使われなくなっている。児童・生徒自身が自己の姿をどのように見つめ、自己のよりよい生き方を求めていく意欲や努力を教師は共感的に理解しようとするのが評価の基本的な態度として求められている。しかし、必ずしも十分な評価活動が行われてきたとは言えない実態が見られることから、平成 26 年 10 月の中央教育審議会答申では「道徳教育全体の充実を図るためには、これまでの反省に立ち、評価についても改善を図る必要がある」ことが示されている。

表3 学習指導要領に示された評価の概要

	小・中学校学習指導要領の記述		
	総則	道徳	
	小・中学校共通	小学校	中学校
昭和33年	指導の成果を絶えず評価し、指導の改善に努めること。	児童の道徳性について評価することは、指導上大切なことである。しかし道徳の時間だけについての児童の態度や理解などを、教科における評定と同様に評定することは適当ではない。	規定なし
昭和43年	指導の成果を絶えず評価し、指導の改善に努めること。	児童の道徳性について評価することは、指導上大切なことであるが、道徳の時間だけについての児童の理解や態度などを、各教科における評定と同様に評定してはならない。	道徳の時間の評価の一環としての生徒の道徳性の評価は、各教科における評定と同様に評定するものではないが、指導上大切なことであり、指導計画や指導方法の改善の基礎をなすものでもあるから、それが適正に行われるように努める必要がある。(昭和44年)
昭和52年	指導の成果を絶えず評価し、指導の改善に努めること。	児童の道徳性については、常にその実態を把握するよう努める必要がある。しかし、各教科における評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。	生徒の道徳性については、常にその実態を把握するよう努める必要がある。しかし、各教科における評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。
平成元年	指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行うとともに、学習意欲の向上に生かすよう努めること。	児童の道徳性については、常にその実態を把握し指導に生かすよう努める必要がある。ただし、各教科における評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。	生徒の道徳性については、常にその実態を把握し指導に生かすよう努める必要がある。ただし、各教科における評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。
平成10年	児童（生徒）のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること。	児童の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし、道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。	生徒の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし、道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。

平成20年	児童（生徒）のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること。	児童の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし、道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。	生徒の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし、道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。
平成27年	児童（生徒）のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること。	児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。	生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

イ 道徳科における評価の意義

平成29年3月に告示された学習指導要領では、道徳科における評価について、「児童（生徒）の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする」と示されている。道徳性は、人間としてよりよく生きようとする人格的特性であるため、「道徳性が養われたか否か」ということは、容易に判断できない。道徳性を養うことを目標として行う道徳科における評価においては、学習の中で、児童・生徒が何を感じ、考えようとしているのか、どんな思いをもったのか等について、教師の積極的かつ共感的な理解が大切となる。「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」（平成29年）では、児童・生徒の1単位時間の授業の学習の様子とともに、中長期的な視点で児童・生徒の個人内の成長を温かく見守り、支え、励ましていく評価観が新たに示されている。

ウ 道徳科における評価の具体的な考え方

道徳性の評価の基盤は、教師と児童・生徒との人格的な触れ合いによる共感的な理解が存在することが重要であり、児童・生徒の成長を見守り、努力を認めたり励ましたりする教師の働き掛けによって、児童・生徒が自らの成長を実感し、更に意欲的に取り組もうとするきっかけとなるような評価が求められている。そのため、評価の基本的な考え方として「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」（平成29年）では、

- ・道徳性の諸様相である道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度のそれぞれについて分節し、学習状況を分析的に捉える観点別評価を通じて見取ろうとすることは～中略～妥当ではないこと
- ・目標に掲げる学習活動における児童（生徒）の具体的な取組状況を、一定のまとまりの中で、児童（生徒）が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を適切に設定しつつ、学習活動全体を通して見取ること
- ・個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること
- ・他の児童（生徒）との比較による評価ではなく、児童（生徒）がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として記述式で行うこと

- ・学習活動において、児童（生徒）が～中略～一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること
- ・調査書には記載せず、入学者選抜の可否判定に活用することのないようにする必要があること

などの留意点が示されている。

(2) 評価の方法について

ア 評価の着眼点

学習指導要領第3章「特別の教科 道徳」の目標の前段では、「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度」を育むためには、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己（人間として）の生き方についての考えを深める」学習が必要であるということが示されている。こうした学習活動を1単位時間ごとの授業で着実に実践し、児童・生徒の学習状況を把握する評価活動を連続させていくことで、児童・生徒の道徳性に係る成長の様子を見取ることが可能となると考える。道徳科の評価については、道徳科の目標に照らし合わせて、

- ・ねらいに含まれる道徳的価値についての理解を深めることができたか
- ・ねらいに含まれる道徳的価値の理解を基に、自己を見つめられたか
- ・ねらいに含まれる道徳的価値の理解を基に、物事を多面的・多角的に考えられたか
- ・ねらいに含まれる道徳的価値の理解を基に、自己の生き方についての考えを深めることができたか

という学習活動における児童・生徒の具体的な学習状況を、一定のまとまりの中で、児童・生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を適切に設定しつつ、学習活動全体を通して見取ることが大切であることが示されている。

イ 評価の視点

児童・生徒は生活経験の中から、道徳的価値についての一定の理解をもっている。授業では、教材から提示された道徳的な問題について、個々の道徳的価値の理解を基に自己を見つめたとき、自分の現在の姿が捉えられ、更に他の児童・生徒と意見を交流し、多面的・多角的に考えることで、自己の生き方について、思い直したり希望を見いだしたりすることができる。道徳科では、道徳的価値の理解と自己の生き方についての考えを相互に関連付けることによって、得られた新たな道徳的価値の理解を基に、自己の生き方について深く学んでいく児童・生徒の学習状況を教師が把握することが求められている。道徳科の評価に当たっては、学習活動において児童・生徒が道徳的価値やそれらに関わる諸事象について、「他者の考えや議論に触れ、自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」「多面的・多角的な思考の中で、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」という視点を重視するとともに、表4「評価の視点と具体的な児童・生徒の姿」に示すような具体的な児童・生徒の姿から見取る必要がある。

表4 評価の視点と具体的な児童・生徒の姿

評価の視点	具体的な児童・生徒の姿
他者の考えや議論に触れ、自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか	<ul style="list-style-type: none"> ・ 道徳的な問題に対する判断の根拠やその時の心情を様々な視点から捉え、考えようとしている。 ・ 自分と違う意見や立場を理解しようとしている。 ・ 複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしている。
多面的・多角的な思考の中で、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか	<ul style="list-style-type: none"> ・ 読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしている。 ・ 自らの生活や考えを見直している。 (自分のよさの確認や発見、これからの課題や目標) ・ 道徳的な問題に対して自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解をさらに深めている。 ・ 道徳的価値を実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしている。 ・ 道徳的価値の意義を見いだそうとしている。 (新たな価値や考え方の発見・創造)

ウ 評価の方法

教師が積極的に一人一人を見取るための評価として、これまで工夫・実践が行われてきた様々な評価方法について検証した。

(7) ノート、ワークシート、感想文による方法

書くことは重要な役割をもっており、児童・生徒がノート、ワークシート、感想文に自分の考え等を書くことで、曖昧であった考えが整理されたり、日頃は意識していない体験や自分自身の状況を想起したりすることができる。また、書くことは考えることでもあり、適切な時間を確保することで、児童・生徒が自分自身と向き合うことができるとともに、教師にとっては、本時のねらいにどこまで迫ることができたのかという指導の評価となる。

(4) アンケートによる方法

アンケートによる方法は、授業前に授業に関わる道徳的価値について児童・生徒の意識を調査したり、考え方の傾向を明らかにしたりと必要な情報を収集するために有効な方法で、授業前後の児童・生徒の意識がどのように変容したのかについて、教師も児童・生徒も確認することができる。

(ウ) 聞き取りやインタビューによる方法

授業中の発言から更に発展した考えを聞き出したい場合や記述したことの根拠を知りたい場合、または記述することや発言することに児童・生徒が躊躇している場合、授業後に聞き取りやインタビューを行うことで、授業中では知り得なかった児童・生徒の学びを把握することができる。

(イ) 観察記録による方法

発言、つぶやき、表情、話合いでの発語、役割演技や動作化による演者の言動、観客の反応など、児童・生徒の自然な姿を観察することで、児童・生徒が学びの姿を表出している様子を評価することができる。また、教師と一緒に活動したり支援したりすることで、児童・生徒の行動や態度の奥にある気持ちを捉えることができる。

(オ) ICTによる方法

ICレコーダーやビデオカメラ等の機器を活用することで、授業では見逃していた児童・生徒の学びの姿や変容を確認することができる。また、板書の記録や録音、撮影によって授業を振り返り、児童・生徒の反応から指導を見直す手だてとすることができる。

2 開発研究

(1) 評価資料作成に当たっての考え方

基礎研究で整理した評価の視点や評価方法を踏まえ、開発研究として評価資料の作成を行った。評価資料を作成するに当たって着目した点は、以下の3点である。

ア 計画的かつ継続的で無理のない評価方法

児童・生徒の学習状況を具体的に継続的に把握し続けることが大切であり、そのためには、計画的に無理のない評価方法で評価材料を蓄積していくことが必要であると考えた。

イ 1単位時間ごとの評価が学期及び年度末の評価につながることを踏まえた評価方法

評価については、「一定のまとまりの中で見取る」ことが解説に示されており、道徳科で養う道徳性は、中・長期的に児童・生徒の変容を見ていくことが必要である。しかし、道徳科の授業でねらいを設定し、児童・生徒に何を学ばせるのかを考え、指導の工夫を行う以上、その1単位時間での児童・生徒の学びの評価も必要である。授業のねらいに照らし、どのような反応があったのか1単位時間の評価を行い、その評価の積み重ねによってこそ、「一定のまとまり」である中・長期的な評価が実現できると考えた。

ウ 指導の改善・充実に生かすことができる評価方法

指導の改善・充実のためには、児童・生徒の学習状況の評価とともに、その成果を見取るに至った教師による指導方法についても評価していく必要がある。指導の効果を客観的に判断し、ねらいや意図したことにどれだけ近付いたかを把握し、その成果を次の指導に生かすことが大切であると考えた。

以上の3点を重視し、本研究においては様々な評価方法がある中で、特に「ワークシートの活用」と「座席表シートの活用」による評価方法に着目し、評価資料を作成した。

(2) 評価方法についての考え方

ア ワークシートの活用について

道徳科の授業においては、児童・生徒の学びの姿を評価する方法として、ワークシートが多く用いられ、活用されている。ワークシートの利点として、授業の中で具体的にどのような学びがあったのか、ねらいとする道徳的価値に関わる児童・生徒の意識がどのように変容したのかを教師が把握しやすく、評価に生かすことができる点がある。また、話し合ったり発言したりすることが困難な児童・生徒でも、書くという表現方法により、教師が児童・生徒の学びを把握することができる。

児童・生徒にとっては、自分の気持ちを見つめ、ねらいとする道徳的価値に対して自分はどのような考えをもったか、これからの自分の生き方についてどのように思うかを書くことを通して意識することで、自らの成長を実感することができる。

書くことで留意しなければならないことは、記述された表現、語彙の豊かさ、文章の長さ等による評価とならないようにすることであり、記述内容の根拠や背景、動機、着目した対象は誰（何）か、どの場面か、道徳的価値の意味をどのように見いだしたのかなどについて、多面的・多角的に見ていくことが大切である。

イ 座席表の活用について

座席表は、授業者あるいは参観者が授業で必要なことをメモとして書き記すなどで活用されており、授業の中で見えた児童・生徒の様子で心に留めておきたい事柄を自由に書き込むことができる。座席表はねらいとする道徳的価値に関わって観察したい児童・生徒を対象に見取ることが可能である。例えば、道徳的価値に関する日常の様子との比較、話し合い活動による友達との関わりから道徳的価値への考えの深まり、対象児童・生徒と他の児童・生徒との意見や考えの共感または対立の様子等、会話、発表、話し合いから学びの姿を授業者等が記述する。ワークシートの児童・生徒の記述と比較することで、より多面的・多角的に評価することができる。また、記述したり話し合ったりすることに困難さを伴う児童・生徒の学びの姿や様子を教師が積極的に捉え、評価することもできる。例えば、教師の話や友達の話に聞き入り考える姿、役割演技や動作化によって考える姿、うなずき、表情、しぐさ、視線の向き等、発言や記述ではない形で表出する児童・生徒の姿について、座席表を通して見取ることができる。

(3) 評価資料について

ア ワークシートの開発

本研究では、1 単位時間の授業で児童・生徒が自己の考えを深める思考のプロセスを重視し、児童・生徒が自己の考えを深める思考のプロセスとして「問う」「判断する」「気付く」という 3 つの段階を設定した。「問う」段階では、児童・生徒は、道徳的価値に関する問題を自分との関わりで自身に問い続ける。その上で「判断する」段階が加わり、友達や教師との交流を通して多様な考えに触れることで思考を深め、児童・生徒は自分の考えをより明確にしていく。最後に、「気付く」段階では、判断したことを再度、自分なりの理由をもって捉え直し、授業の最終段階での自己の考えを明確にする。この「問う」「判断する」「気付く」という自己の考えを深める思考のプロセスに沿ってワークシートを開発した。

(7) 「問う」、「判断する」場面で考えるワークシート（Aタイプ）

Aタイプのワークシート（図1）は、[自分の考え]に記載したことを基に多様な考えと交流した結果、どのような考えに心を動かされたのか、何を感じたのか、自分は何を大切にしたいと考えたのか、「問う」場面から「判断する」場面までの変容を見取ることができる。児童・生徒が「話し合い後の考え」を書けない場合には、話し合い活動を通し、自分の考えに近い意見や納得した意見を書かせるようにする。この場合でも多様な意見を受け入れ、見方が変わったり、広がったりしたことで評価をすることができる。

	④	かじでみたいことを考えたりした。					★学習をふり返りましょう。 五・六年 組 番号前 () 道徳科 第 回 月 日)
	③	今までの自分の生活をふり返ったり、これからの自分の生活に生					
	②	友達の考えを聞き、○○○について考えを深めた。					
	①	自分の考えをもった。					
		○○○について考えた。				ふり返ること	
						ふり返ること	

★分かったことや考えたこと、疑問に思ったことを書きましょう。

図3 「気付く」場面で考えるワークシート（Cタイプ）

イ 座席表シートの開発

本研究では、ねらいとする道徳的価値に関わって特に観察したい児童・生徒の姿を見取ること、記述したり話し合ったりすることに困難さを伴う児童・生徒を見取ること、の2つの視点から、座席表の活用について表5のようにまとめるとともに、想定場面で活用できる座席表シートを以下のように開発した。

表5 座席表シートを使用する目的と使用する想定場面

	ねらいとする道徳的価値に関わって特に観察したい児童・生徒の姿の見取り	記述したり話し合ったりすることに困難さを伴う児童・生徒の姿の見取り
授業前	<ul style="list-style-type: none"> アンケートを用いて、ねらいとする道徳的価値に対する捉えを把握する。 ねらいとする道徳的価値に関する日頃の様子を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時でどの児童・生徒を観察の中心とするか決定し、支援の方法を考える。
授業中	<ul style="list-style-type: none"> 事前の見取りを中心発問等で、意図的指名に用いる。 児童・生徒の発言内容を記録する。 児童・生徒の発言につながりがある場合には、記号等で記録する。 	<ul style="list-style-type: none"> 教材の提示の様子を記録する。 うなずき、考える様子、友達の発言の聞き方などを記録する。どの発問、場面で見られたか記録する。 板書に書かれている内容や、いくつか発表された意見に対して、どの考えに近いかを問い、児童・生徒が挙手した内容を記録する。
	<ul style="list-style-type: none"> 話し合い活動等の机間指導の際、児童・生徒の発言、学習態度、他の児童・生徒との関わり等を記録する。 事前の見取りにより、自己の振り返りのところで書くことにつまずきが予想される場合に、支援を行う。 	
授業後	<ul style="list-style-type: none"> 授業中の発言や学習態度から気になる児童・生徒にインタビューし、発言を記録する。 座席表シートに記録した児童・生徒の発言や学習態度とワークシートに書かれていることを比較し、児童・生徒の評価を行う。 	

(7) 個へのアプローチで見る座席表シート

図4は、本時のねらいに即して、どのような姿を期待するのかを明確にして、対象児童・生徒の様子を見取ることを中心とした座席表シートである。活用に当たっては、ねらいに向けてどのようにアプローチしていくのか、どの場面で見取るのかを明確にしていく必要がある。

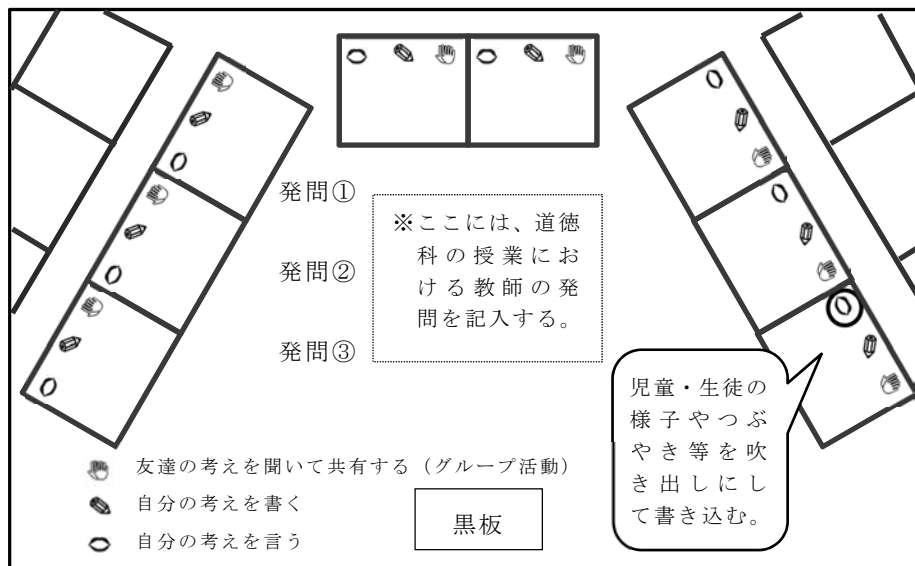


図4 個へのアプローチで見る座席表シート

(イ) 他者との関わりから見る座席表シート

図5は、他者との関わりから見る座席表シートである。教師の手だてとともに、他の児童・生徒の発言等で、児童・生徒は思いが変わったり物事を捉える視点が広がったりする。教師は、対象児童・生徒の考え方は誰と関わったことによってどのタイミングで変容したのか、話し合い活動等で道徳的価値の理解をどのように深めたのかを記しておく。また、関わりは双方向でもあることから、対象児童・生徒とともに周りの児童・生徒の新たな理解の手掛かりとなることも期待ができる。

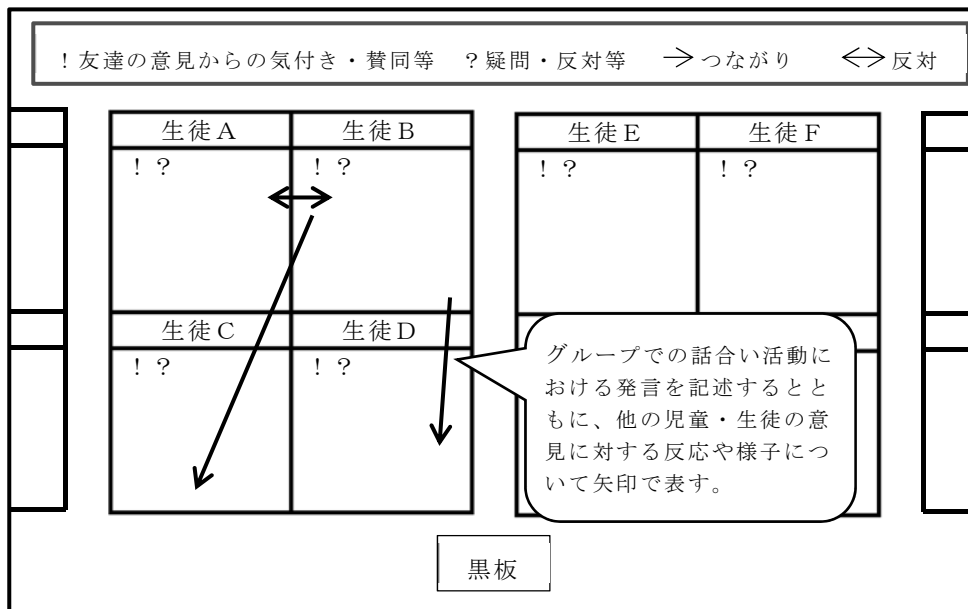


図5 他者との関わりから見る座席表シート

(ウ) 各教科等や日常生活との関わりから見る座席表シート

図6は、本時の内容項目やねらいに関わって、対象児童・生徒の各教科等の学習状況や日常生活の実態からよさをどのように深化させるのか、または不十分な点をどのように補充するのか明らかにして見取ることを中心とした座席表シートである。記述したり話し合ったりすることが困難な児童・生徒には、意図的指名を行う場面を想定し、これまでの授

業と比較しどのような表情、しぐさが見られたのかを記すこともできる。

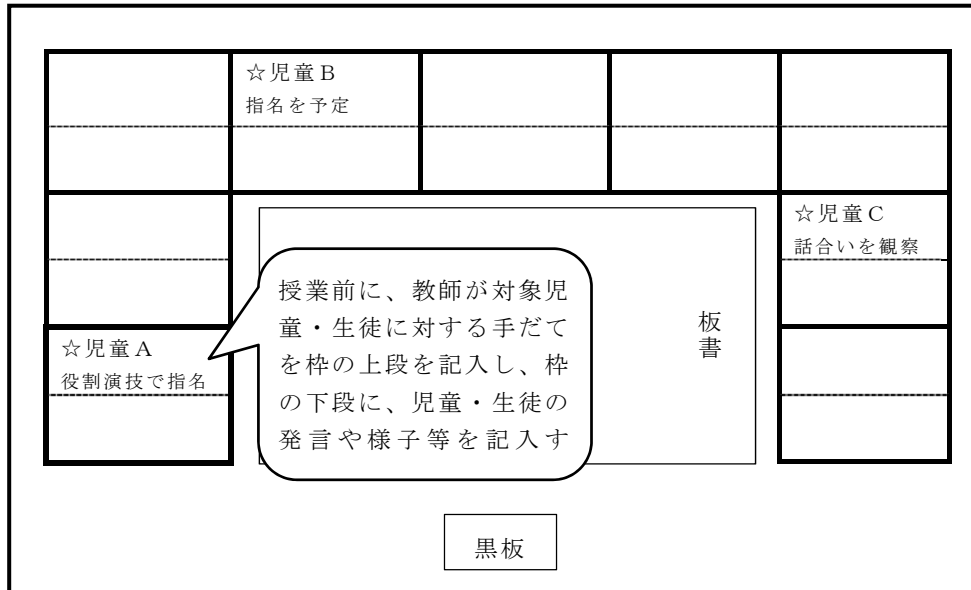


図6 各教科等や日常生活との関わりから見る座席表シート

3 検証授業

(1) 小学校（第3学年）

主題名 みんなで使う物や場所だから【内容項目 C（11）規則の尊重】
 ねらい 約束や社会のきまりの意義について理解を深め、公共の物や公共の場を使うときの約束や社会のきまりを進んで守ろうとする判断力を養う。
 教材名 「あめだま」（「小学校 道徳の指導資料とその利用1」文部省）

ア 主題設定の理由

(7) ねらいとする道徳的価値

社会生活を送る上で、児童一人一人が相手や周りの人の立場に立った公共心や公德心を培うことは、よりよい人間関係を築き、集団生活を円滑に行っていくための基盤として、大変重要なことである。特に、人と人が仲間をつくり、よりよい人間関係を形成する上では、自分の思いのままに行動するのではなく、集団や社会のために自分が何をすればいいのか、また、自分に何ができるのか、自他の権利を十分に尊重する中で果たすべき自らの義務を考える必要がある。そして、社会集団を維持・発展させていくために、公共物や公共の場を利用する際には、他者の気持ちや立場を尊重しながら、進んで約束やきまりを守って行動する態度にまで広げていく必要がある。

そこで、約束や社会のきまりの意義について理解させ、自ら進んでそれらを守ろうとするための判断力を養いたいと考える。

(4) 児童の実態

この時期の児童は、気の合う仲間や集団の中にきまりをつくり、自分たちの仲間や集団及び自分たちで決めたことを大切にしようとする傾向がある。また、一人一人が身近な生活の中で、約束や社会のきまりと公共物や公共の場との関わりについて考えることは少ない。自分の物については執着する反面、公共物や公共の場となると、自分の気の向くまま

に振る舞う傾向もある。このような発達の特徴を生かし、一般的な約束や社会のきまりの意義やよさについて理解し、それらを守るように指導していくことが大切であると考え。さらに、社会集団を維持発展する上で、社会生活の中において守るべき道徳としての公德を進んで大切に作る態度にまで広げていく必要がある。

そこで、社会一般の約束や社会のきまりについての理解を基盤にし、公共の場できまりを守ることができない人間的な弱さや、自律的にきまりを守ろうとすることのよさに目を向けさせる。公德心に基づいて、自ら進んで社会生活における約束や社会のきまりを守っていこうとする判断力を養いたい。

(ウ) 教材の活用について

本教材は、電車の中で、妹が床にこぼした小さなあめだまを、一生懸命に拾っている一人の女の子（姉）の姿に、ちょうど乗り合わせていた「わたし」が感動し、すがすがしい気持ちになった、という話である。妹がこぼしたあめだまを拾う女の子の自然な姿を自分のこととして考えることができるようにBGMを活用したり、場面絵をプレゼンテーションソフトで大きく投影したりするなど、教材の提示を丁寧に行う必要がある。また、公德心に基づいて行動しようとする女の子について、多面的・多角的な視点で考えさせることで、ねらいとする道徳的価値の理解を深められるようにしたい。

イ 学習指導過程

	学習活動 (○主な発問 ◎中心となる発問 ・予想される児童の反応)	◇指導の留意点
導 入	1 アンケートの結果を見て、「約束や社会のきまり」について現在の自分を振り返って考える。 ○みんなで使う物や場所には、どんなものがありますか。 ・公園、図書館、学校、駅のトイレ、ポスト ○みんなの物や場所を使うとき、どんなことを考えて使っていますか。 ・公園ではごみを捨てずに持って帰る。	◇「約束や社会のきまり」について、一人一人の児童に、自分の経験を振り返って考えさせる。
展 開	2 教材「あめだま」を読んで、話し合う。 ○噛み終わったチューインガムを踏んでしまった「わたし」は、どんなことを考えたでしょう。 ・どうしてこんなところに捨てるんだろう。 ・迷惑だな。自分勝手な人だな。 ◎道や駅にチューインガムを捨ててしまう人と、妹がこぼしたあめだまを拾おうとする女の子と、どんなところが違うでしょう。 ・捨てた人は自分のことしか考えていなかったけど、女の子は周りの人のことも考えていた。迷惑にならないようにしていた。 ・捨てた人はみんなの場所とは考えていなかった。女の子はみんなが使う場所だからきれいにしないといけないと思っていた。	◇捨ててしまう人間の弱さに着目させる。 ◇少人数グループで考えを交流させる。話し合い活動中の児童の意見を把握しておき、全体での話し合いに生かす。

<p>展 開</p>	<p>・女の子は自分が落としたわけじゃないけど、みんなの場所だから拾った。 ○女の子の姿を見て、「心のおくりもの」をもらったような気がしている「わたし」は、どんなことを考えていたでしょうか。 ・みんなに迷惑をかけないように行動した女の子はすごいな。 ・他の人のことを考えて、きれいに使うことが大切だと思った。 ・お互いにちゃんと使うと気持ちがいいな。 3 自分の生活を振り返って考える。 ○みんなのものや場所を使うとき、あなたはどのように使おうと考えますか。 ・自分がすることが他の人の迷惑にならないか考えてから使う。 ・次の人が気持ちよく使えるように、きれいに使いたい。</p>	<p>◇女の子自身が汚したわけではないが、公共の場であるから、周りの人のことを考え、きれいにしようとしていたことを押さえる。 ◇導入のアンケート結果を振り返らせ、自分との関わりで「約束や社会のきまり」を捉えさせる。 ◇ワークシートの活用</p>
<p>終 末</p>	<p>4 教師の説話を聞く。</p>	<p>◇みんなで使う物や公共の場を大切にしようとする姿を見た経験について話し、判断力を高めさせる。</p>

ウ 評価

- ・公共の場で、妹が落としてしまったあめだまを拾う女の子の考え方に触れることを通して、約束や社会のきまりについて自分との関わりで考えを深めることができたか。
- ・約束や社会のきまりを進んで守る大切さについて考えることができたか。

エ 授業分析

(7) 観察対象児童Nの学びの姿からの見取り

《本時のねらいに関わって、児童Nへの教師の意図》

事前アンケート「みんなの物や場所を使うとき、どんなことを考えて使っていますか」では、「図書館で、本をたくさん読みたいという気持ちで使っている」と回答した。チューインガムを踏んでしまった「わたし」、電車内で妹がこぼしたあめだまを拾った女の子を見た「わたし」の姿を通して、公共の場や場所を使うときの約束や社会のきまりの大切さを感じ取らせたい。

《道徳科の授業における児童Nの姿》

- ・集中力が続かないことがある。
- ・授業の中で挙手し、発表することはほとんどないが、友達の発言に敏感でつぶやくことが多い。
- ・ワークシートには、書いたり書かなかったりする。

評価の場面	評価の方法	児童の活動や反応の場面
「問う」場面	座席表シート	発問1 チューインガムを踏んでしまった「わたし」の気持ちを考える。(挙手をして、発言をする。)
「判断する」場面	座席表シート	発問2 チューインガムを捨てる人と、女の子の違いを考える。(挙手をして、発言する。)
「気付く」場面	ワークシート	自己評価 (「今日の学習をふり返りましょう。’)の項目で、全項目に◎を記入している。記述なし。

(1) 児童Nの授業記録

	学習活動 T：教師の発問、問いかけ C：児童の発言	N：対象児童の発言、反応
展 開	<p>発問1 T：嘸み終わったチューインガムを踏んでしまった「わたし」はどんなことを考えたでしょう。 C：ぼくもそう思う。 T：不愉快な気持ちって思う人は他にもいますか。同じ考えの人はグーで教えてください。 C：(学級の三分の一の児童が挙手) T：納得いかないってどういうことだろう。</p>	<p>N：挙手をする。 N：不愉快な気持ち。 N：さらに挙手をする。 N：やっぱり納得がいけない気持ち。</p>

展 開	<p>C：どうしてこんなところにガムが落ちているんだ、という気持ちだと思う。</p> <p>発問2</p> <p>T：女の子は、面倒くさいという気持ちはなかったのかな。だって、床に落ちたあめですよ。</p>	<p>N：挙手をする。</p> <p>N：でも、まだ食べていないあめだから、拾えるよ。もし、人が踏んじったりしたら、靴の裏がベタベタになるから人が困ると思うよ。</p>
--------	--	--

【学習状況の見取り】

教材の登場人物の行動から約束や社会のきまりについて考えることを通して、約束や社会のきまりを守らない人がいると、周りで迷惑する人がいることに気付くことができた。また、女の子があめだまを拾おうとした判断がどこにあるのかについて考えることができた。

(2) 中学校（第2学年）

主題名 不公正を許さぬ心【内容項目 C（11）公正、公平、社会正義】

ねらい いじめの愚かさを知り、差別、偏見を憎み、不公正な言動を断固として許さない心情を育てる。

教材名 「卒業文集最後の二行」（「私たちの道徳」中学校 文部科学省）

ア 主題設定の理由

(7) ねらいとする道徳的価値

正義とは、人が踏み行うべき正しい道筋や社会全体としての正しい秩序等を広く意味し、法にかなっていることや各人に正当な持分を与えるという意味もある。公正さとは、分配や手続きの上で公平で偏りがなく、明白で正しいことを意味する。よりよい社会を実現するためには、正義と公平さを重んじる精神が不可欠であり、物事の是非を見極めて、誰に対しても公平に接し続けようとする必要がある。また、法やきまりに反する行為と同様に、自他の不公正に気付き、それを許さないという断固とした姿勢と力を合わせて積極的に差別や偏見をなくす努力が重要である。

そこで、正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めようとする心情を育てたいと考える。

(4) 生徒の実態

生徒は小学校高学年の段階で、誰に対しても差別することや偏見をもつことなく、公正、公平な態度で接し、正義の実現に努めることの大切さについて学んでいる。中学校入学から間もない時期には、自己中心的な考え方や偏った見方をしてしまい、他者に対して不公平な態度をとる場合があった。学級や学年で協力し各行事を成功させることで、互いの個性を大切にするよさを感じてきた。しかし時に、仲間外れにされたくない気持ちから、周囲で不公正があっても多数の意見に同調したり傍観したりするだけで、制止することができないことがある。そして、不正な行動等が起きても、勇気を出して止めることに消極的になってしまう姿も見られる。

そこで、置かれている自分の立場に目を向けさせ、差別や偏見をなくすように努力し、不正を憎み、不正な言動を断固として否定する社会の実現に積極的に努めようとする心情

を育てたいと考える。

(ウ) 教材の活用について

本教材は、登場人物である「私」が小学校6年生のときのできごとを回想録の形で描いている。「私」はT子との生活環境等の違いから、T子に対して差別や偏見をもち、いじめる。ある日、「私」はT子のテストをカンニングして満点をとる。そのことで自身の弱さを痛感するが、周りの言動に流され、自分の不正を棚に上げ、T子がカンニングしたのではないかと責め立てた。やがて卒業式を迎え、配られた卒業文集に書かれたT子の最後の二行を読み、「私」は涙が止まらなかったという話である。生徒は、自分と他者との違いから、相手を除外しようとしたり除外されたりする体験や、不正な行いがあっても自分自身を正したり周りの不正を正したりすることは難しいという体験が少なからずあるだろう。

そこで、登場人物の「私」の気持ちを共感的に考えさせることで、いじめの愚かさを感じさせ、差別や偏見を憎み、不正な言動を断固として許さない心情を育てたいと考える。

イ 学習指導過程

	学習活動 (○主な発問 ◎中心となる発問 ・予想される児童の反応)	◇指導の留意点
導 入	1 教材について知る。 今日の教材は「卒業文集最後の二行」です。東北の津軽に近いところのお話です。どんな状況なのか考えながら聞いてください。	◇教材の舞台が東北の津軽に近い地域であり、津軽弁で書かれていることを伝え、生徒に興味をもたせる。
展 開	2 教材「卒業文集最後の二行」を読み、話し合う。 ○卒業文集の最後の二行を読んで涙が止まらなかった「私」は、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・T子さんに本当に辛く、悲しい思いをさせてしまった。 ・周りの人と一緒にいじめたことを後悔している。 ・外見で人を判断する自分の醜さに気付いた。 3 自分の生活を振り返って考える。 ◎人はなぜいじめてはいけないと分かっているのに、いじめてしまうのか。どうしたらいじめはなくなるのだろうか。 ①なぜいじめてしまうのか。 ・立場に上下関係を作ってしまう気持ちがあるから。 ・いじめを楽しいと思う人が少なからずいるから。 ・人を見下して優位でいたいという弱さが人間にはあるから。 ②どうしたら、いじめはなくなるのか。 ・一人一人が人の気持ちを考えること。相手の立場を考える。 ・注意する。一人でできなければ、何人かで注意して止める。 ・いじめが起こる前に、みんなで仲よくする。 ○今日の授業で感じたことや気付いたことは何でしょう。 ・友達みんなに対して公平に接しているのか自信がない。人の好き嫌いはあっても、その人のよいところを見ていきたい。	◇「さんざんいじめていたにもかかわらず、何で今さら涙を流すのか。」と問い返すことで、主人公の不正さについて考えさせる。 ◇ワークシートの活用 ◇差別や偏見の心が生まれてしまう人の弱さや不公正な行動をとってしまう人の弱さについて気付かせる。 ◇不公正な言動を許さないために、自分に必要なことを考えさせる。 ◇ワークシートの活用
終 末	4 今日の学習を振り返る。 東京都中学校生徒会会長サミットで採択された「いじめ撲滅宣言」について紹介します。	◇「私たちの道徳」P165を読み、不公正なことはしないようにしようという気持ちにつなげる。

ウ 評価

- ・差別や偏見をせずに、不公正な言動を許さない気持ちをもつことができたか。
- ・多様な感じ方や考え方に触れ、公正、公平な社会の実現に向けた、思いや考えを深めることができたか。

エ 授業分析

(7) 観察対象生徒Eの学びの姿からの見取り

《本時のねらいに関わって、生徒Eへの教師の意図》

自分の考えを述べたり、友達の考えを受け入れたりすることを通して、いじめをなくすことの難しさも感じながら、公正、公平についての考えを広げさせたい。

《道徳科の授業における生徒Eの姿》

- ・ワークシートに自分の考えを記述する。
- ・グループでの話し合い活動では積極的に発言することが多い。
- ・全体での話し合い活動では、指名しても自分の考えを発言することはない。

評価の場面	評価の方法	生徒の活動や反応の場面
「判断する」場面	ワークシート 座席表シート	発問2 グループでの話し合い活動 友達の意見を積極的に聞く。 （「生きている全ての人々の心が変わる。」と記述する。）
「気付く」場面	ワークシート	自己評価 （すべての項目の「とても思う」に○を付ける。） 記述 （「一人一人の心がいい方向に変わっていくしかない。」と記述する。）

(1) 生徒Eの授業記録

	学習活動 T：教師の発問、問いかけ C：生徒の発言	E：対象生徒の発言、反応
展開	<p>発問2</p> <p>T：人はなぜいじめはいけないと分かっているのに、いじめてしまうのか。どうしたらいじめはなくなるのだろうか。</p> <p>[グループでの話し合い活動]</p> <p>C：一人一人の長所を知って、人の気持ちを考えることが大切だと思う。</p> <p>C：すごく説得力があるね。うん。世界中の人々の心を変えるしかない。</p> <p>T：今日の授業で感じたことや気付いたことは何でしょう。 (ワークシートに記入)</p> <p>―授業後ワークシートに記入したことの聞き取り―</p>	<p>E：どうしたらいじめがなくなるんだろう。生きている全ての人たちの心を変えるしかないよ。</p> <p>E：にっこりと笑う。</p> <p>E：Zさんはどう思う？</p> <p>E：(ワークシート)「一人一人の心が、いい方向に変わっていくしかない。他のことについても考える。」と記入する。</p> <p>E：(聞き取り)生き物、虫、植物のことも考える。みんな、自分のことばかり考えているからいじめはなくなるらない。</p>

【学習状況の見取り】

人には差別や偏見をもってしまいう弱さがあり、公正、公平な心で生活することは難しいことを理解した上で、公正、公平を実現するためには、自分のことばかりでなく、生き物全てを思いやる心が大切であることに視点を広げて考えを深めることができた。

(3) 中学校（特別支援学級）

主題名 学校の伝統を引き継ぐ【内容項目 C（15）よりよい学校生活、集団生活の充実】
ねらい 先輩たちの努力によって培われた伝統を後輩の在校生が継承し、みんなで協力し合って、よりよい伝統の樹立と発展に努める態度を育てる。
教材名 「ミソアジの学校」（「新 あすを生きる1」日本文教出版）

ア 主題設定の理由

(7) ねらいとする道徳的価値

生徒にとって学級や学校は、生活の大半を過ごす大切な場である。学校は、公的な集団生活である点で私的な集団生活の場である家庭とは大きく異なっている。また、生徒の生活の場である学校は、それぞれ一様ではなく、伝統はその学校の歴史そのものである。地域の風土や文化は、人々に支えられて、先輩たちが長年に渡って努力して培ったものであり、後輩たちがそれを継承し、協力し合ってよりよい伝統へと発展させていくものである。

歴史をつなぎ、更に発展させる主役は在校生、つまり自分自身に他ならないという自覚をもたせたい。

(4) 生徒の実態

小学校の段階では、特に高学年で、先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合ってよりよい学級や学校をつくるとともに、様々な集団の中での自分の役割を自覚して集団生活の充実に努めることについて学んできた。中学校に入学して間もない1年生は、学校生活の環境の変化により、教師や学校の人々への敬愛の気持ちや学校に対する愛校心、集団への帰属意識も十分ではない傾向があった。しかし、2・3年生と共に生活することで、中学校生活にも慣れて、学校や学級が重要な生活の場として実感できる生徒が増え、学級の一員としての自覚が芽生えてきた。また、1～3年生みんなで力を合わせ、学校行事等を成功させたことで、集団への帰属意識が高まってきた。本校の伝統の一つである「挨拶」について、挨拶の大切さは理解しているものの、挨拶が伝統であるという認識を高めていく必要がある。

自校の伝統について理解し、伝統を継承し、発展させようとする意識を高めさせたい。

(4) 教材の活用について

本教材は、主人公の「僕」がN中伝統のミソアジ運動を経験して考えたことが書かれている。ミソアジ運動が始まった当初は、挨拶（ミソアジの「ア、あいさつをきちんとしよう」）に消極的だった「僕」が、先生や卒業生である父親からの話を聞くうちに少しずつ気持ちに変化し、ミソアジ運動の挨拶に前向きに取り組むようになるという話である。「僕」のミソアジ運動への気持ちの変化を考えさせることを通して、伝統を継承し、発展させようとする態度を育てたい。

イ 学習指導過程

	学習活動 (○主な発問 ◎中心となる発問 ・予想される生徒の反応)	◇指導の留意点
導入	<p>1 教材に興味をもつ。</p> <p>○「ミソアジの学校」の「ミ・ソ・ア・ジ」とは、何のことだと思いますか。</p> <p>・「味噌味」だと思う。何かの料理を作るんだと思う。</p> <p>今日は、みんなでよりよい校風をつくっていくことについて考えていきましょう。</p>	<p>◇教材名を提示し、「ミソアジ」は伝統に関わる頭文字であることとその内容を紹介し、生徒に興味をもたせる。</p> <p>◇学習のめあてを知らせる。</p>
展開	<p>2 教材の前半を読み、話し合う。</p> <p>○初めての「ミソアジ運動」で、小さな声で挨拶を返し、足早に校門へ向かったとき、「僕」はどんな気持ちだったでしょうか。</p> <p>・挨拶は大事だと分かっているけど、恥ずかしかった。</p> <p>・大声で挨拶するのは恥ずかしいと思った。</p> <p>・他から押し付けられている気がして嫌だと感じた。</p> <p>○「僕」だけでなく、どうして他の人も大きな声で挨拶ができるようになったのでしょうか。</p> <p>・大きな声で挨拶をして、とても気持ちがよかったから。</p> <p>・生活委員がずっと大きな声で挨拶運動していたから。</p> <p>・学校全体が大きな目標に向かって動いていると感じたから。</p> <p>3 教材の後半を読み、話し合う。</p> <p>◎どうして「僕」は、伝統を守り、発展させていくことが大切だと思ったのでしょうか。</p> <p>・これまで伝統を守ってきた先輩たちのためだと考えたから。</p> <p>・地域の人たちがいつも見守ってくれているから。</p> <p>・自分たちの学校のために必要だと思ったから。</p> <p>・入学してくる後輩のために必要だと思ったから。</p> <p>4 本校の伝統を受け継ぎ、更によりよい伝統を作っていくために、自分が特に取り組みたいことを考える。</p> <p>○自分たちの学校の伝統の中から、自分が特に取り組んでみたいことは何ですか。</p> <p>・大きな声で挨拶をする。相手の目を見て挨拶をする。</p> <p>・掃除を丁寧にする。地域のゴミ拾いのときにたくさん拾う。</p> <p>・文化祭で大きな声で歌う。</p>	<p>◇「僕」の伝統に対する気持ちについて考えながら範読を聞くように伝える。</p> <p>◇押し付けがましきや恥ずかしさを感じ、すぐに行動に移すことができないという「僕」の思いに気付かせる。</p> <p>◇学校の伝統を継承し、よりよい伝統を作っていくには、一人一人が努力し、協力していくことが大切であることを押さえる。</p> <p>◇学校の伝統を継承し、発展させていくことは、卒業生や地域の方、自分たちや今後入学してくる後輩のためであるということを押さえる。</p> <p>◇「10周年式典 生徒文集」の「私たちの学校にこれから期待すること」について紹介し、本校の伝統について確認する。自分ができることを考えさせる。</p> <p>◇よりよい伝統を作っていくという思いを共有させる。</p> <p>◇ワークシートの活用</p>
終末	<p>5 教師の説話を聞き、学習を振り返る。</p>	<p>◇伝統を継承し発展させていくという意欲を高めさせる。</p>

ウ 評価

自分の学校の伝統について理解を深め、みんなで協力し合ってよりよい伝統を作っていくという思いをもつことができたか。

エ 授業分析

(7) 観察対象生徒Bの学びの姿からの見取り

《本時のねらいに関わって、生徒Bへの教師の意図》
 友達との話し合い活動を通して、本校のよさに気付き、よりよい伝統を作っていこうとする気持ちをもたせたい。

《道徳科の授業における生徒Bの姿》
 ・自己評価に○を付けるが、文章で表現することが難しい。
 ・ほとんど挙手することはなく、発言もない。

評価の場面	評価の方法	生徒の活動や反応の場面
「問う」場面	座席表シート (T2)	発問1・発問2 (発言なし。友達発言を聞いている。)
「判断する」場面	座席表シート (T1)	発問3 意図的指名により発表をする。
	ワークシート (T1)	発問3 (「卒業生から受け継がれているから。」と記述する。) 発問4 (記述なし。)
「気付く」場面	座席表シート (T2)	発問4 グループでの話し合い活動
	ワークシート	自己評価 (「自分の意見を考えることができた」「他の人の意見を聞くことができた」両方の項目に、「すこしできた」に○を付ける。) 記述 (記述なし。)

(4) 生徒Bの授業記録

	学習活動 T：教師の発問、問いかけ C：生徒の発言	B：対象生徒の発言、反応
展開	<p>発問3 T1：どうして「僕」は、伝統を守り発展させていくことが大切だと思ったのでしょうか。 T1：(意図的指名をする。)</p> <p>発問4 T1：自分たちの学校の伝統の中から、自分が特に取り組んでみたいことは何ですか。 (ワークシートに記入)</p> <p>[グループでの話し合い活動]</p>	<p>B：卒業生が受け継いできた学校の伝統を守らないといけないと感じたからだと思います。</p> <p>B：書こうと筆記具をもっていたが、考えを書くことができなかった。</p>
	<p>[グループの話し合い活動の様子] (T2による見取り)</p> <p>C：私から…。大きな声で挨拶する。 C：私も、大きな声で挨拶するって書いたよ。 C：私は、明るい元気な声で挨拶するのが大事だと思うから、元気に挨拶する。 C：Bさんは。 B：書いてないよ。 C：今、考えたことでもいいから。 C：(みんな少し待つ) C：えっと、目を見て挨拶する。 T2：(Bの様子を見て) 何が一番大切だと思う？ C：(全員に) 何がいいと思う？ B：挨拶なら、何でもいいんじゃないかな。 C：私は大きな声かな。 T2：(Bの発言を受けて、Cの意見を深めようとする。) C：大きい声でないと、相手に聞こえない。</p>	

	<p>C：でも、大き過ぎると、うるさいよね。 B：大きな声でも反応しない人がある。 T2：(Bに対して) じゃあ、どんな挨拶をしていくのがいいのかな。 B：(黙り込む) C：小さい声だと聞こえないし…。 C：ちょうどいい声で、相手の顔を見て笑顔で挨拶するのがいいと思う。</p>	
終末	<p>5 教師の説話を聞き、学習を振り返る。 (ワークシートに記入)</p>	<p>B：(自己評価) 悩んだ末、「すこしできた」に○を付ける。感想を書く時間が残っておらず、書くことができなかった。</p>

【学習状況の見取り】

「僕」の気持ちを考えることを通して、伝統は卒業生から脈々と引き継がれていることに気付いた。ただ挨拶をすればよいのではなく、相手の顔を見て笑顔で挨拶することが大切なのではないかという友達の意見から、伝統を継承し、よりよい伝統を作っていくためには、どうすればよいのかを考えることができた。

第5 研究の成果と今後の取組

1 研究の成果

本研究では、基礎研究として道徳教育の評価に関する変遷や、学習指導要領に示された評価の在り方や考え方について整理・分析した。そして、基礎研究を基に開発研究として評価資料等を開発した。それらを通じて、研究の成果として主に以下のことが挙げられる。

- ・道徳教育に関する評価の在り方や考え方について、学習指導要領等を基にしながら整理・分析し、基礎研究の結果として提示することができた。
- ・1単位時間の授業で児童・生徒が自己の考えを深めるプロセスを明確にした上で、道徳科の1単位時間の授業における評価資料（ワークシート、座席表シート）を開発することができた。
- ・道徳科の1単位時間の授業における評価資料（ワークシート、座席表シート）を活用した評価モデルを開発することができた。

2 今後の取組

本研究における今後の取組は以下の通りである。

- ・本研究では道徳科の1単位時間の授業における評価について提案しているが、中・長期的な評価の在り方等についても更に検討していく。
- ・本研究の内容を基に、各学校が道徳科における指導と評価を充実させられるよう、研究の内容や開発した評価資料（ワークシート、座席表シート）について、周知していく必要がある。そこで、本研究の内容をまとめた指導資料「道徳科 指導と評価のガイドブック」を作成し、都内公立小学校、中学校全校に配付する。
- ・本研究の内容をまとめた教員研修プランを作成し、各学校に配付する指導資料と合わせて学校や教育委員会等において道徳科における指導と評価についての教員研修を実施していく。